

<原著>

我が国における海水浴の受容・発展に関する研究
—大野海水浴場（潮湯治場）—

國木孝治¹ 東川安雄²

A study on the acceptance and development of sea bathing in Japan
— Focusing on the bathing beaches (Shio-touji Sites) in Ohno, Aichi Prefecture —

Takaharu Kuniki¹ and Yasuo Higashikawa²

Abstract

The concept of sea bathing (in Japanese, kaisui-yoku) in Japan was diffused from Western Europe from the late Edo period to the early Meiji period. However, before this period, a behavioral pattern similar to sea bathing called shio-touji (sea bathing for medical purposes) had already existed in Japan. Among these regions, Ohno has a history of shio-touji that can be traced back to around the Heian and Kamakura periods.

The aim of this research is to gain an understanding of the historical phenomena that led to the transition to sea bathing culture from shio-touji, which had been carried out prior to the diffusion of the concept of sea bathing in Ohno, and to shed light on the processes of propagation, change and transformation from its origins. This research will consider these aspects from the following perspectives:

1. The origins and period of development of shio-touji
2. The diffusion and period of development of sea bathing

In summary, the following points became clear.

Behavioral patterns during the 12th and 13th centuries comprised of actions and behaviors carried out by individual people known as yuami, which can be considered as a kind of voluntary behavioral pattern dating back either to before the establishment of shio-touji as an element of this region's culture or to around the onset of its establishment.

In the 14th century, shio-touji began to be accepted as an action that had the express purpose of treating illness. During the 16th and 17th centuries, a stage had been reached whereby knowledge of its efficacy in treating illness was widely disseminated.

In the 18th century, shio-touji began to be accepted by people from a wider range of societal levels. It was also a period in which more efficient behavioral patterns were invented and accepted, such as taking seawater home, heating it and taking a bath.

In the 19th century, while the rules of bathing for shio-touji became more clarified, such as

1 広島大学大学院教育学研究科
Doctoral Program in the Graduate School of Education, Hiroshima University

2 広島大学教育学部
Graduate School of Education, Hiroshima University

regarding optimal duration and frequency, we see, at the same time, a social background begin to emerge in which it was acceptable for each person to choose his or her own style.

The concept of sea bathing in Ohno was propagated between 1881-1882 by head of the Ministry of the Interior, Department of Health, Nagayo Sensai and Goto Shinpei, and took over the existing shio-touji sites as bathing beaches. Following this, transportation became more convenient with the opening of railways from 1886 and beach bathing began to grow at an accelerated pace, due in part to the added stimulus of railway companies taking such initiatives as running bathing beaches.

1. はじめに

海水浴は、我が国における海洋性レジャー・レクリエーション活動の中で最も多くの人々が参加している活動であり、現代の夏のレジャーとして広く国民に受容されている^{註1)}。その歴史を紐解くと、海水浴は病氣治療や療養を目的として、江戸後期から明治初期にかけて伝播・導入されたことが諸説より導き出される¹⁻³⁾。しかし、海水浴という概念を如実に反映させたような行為や場が、突如として出現したとは考えにくい。例えば、海中への浴み行為は先史の中に探し求めることができる^{註2)}。さらには、各地に偏在していた潮湯治のような類似的行動様式を踏まえたうえで捉える場合や、西洋の医学的認識を介して伝播された医療として、海水浴場の開設時期として、行楽やレジャーとして捉える場合等、その起源は単一的なものではない。したがって、先史の行動様式との関連性をはじめ、海水浴が我が国に導入された時期の様相やレジャー化に至る推移、それらに伴った浴み・泳ぎといった行為それ自体の意味の変容等の究明が不可欠である。

我が国における海水浴および海水浴場の歴史的な研究としては、小口³⁻⁷⁾ および上田⁸⁾ による論考が挙げられる。小口による一連の研究は、歴史地理学の視点から取り組まれたものであるが、海水浴発祥期の概要を掴むことができ、且つ、先史より各地で行われていた潮湯治についても対象とされており、包括的な海水浴史として参考とされる。上田による研究は、潮湯治を含めた初出資料の整理に重点が置かれており、資料発掘量は豊富であると言える。しかし、いずれの研究も特定の地域を通史的に取り扱ったものではなく、複数地域の事象を列記し、整理・考察したものである。また、先史から海水浴に至る変化・変容の様相、レジャー化の時期等の解明には至っていない。

次に、都道府県ごとの実態解明を試みた先行研究としては、岡山県に関する上田⁹⁾ による研究、新潟県に関する十代田¹⁰⁾ による研究、富山県に関する富澤¹¹⁾ による研究、島根県に関する森口¹²⁾ による研究が挙げられる。更に、地域を限定した研究としては、海水浴場経営に着目した綿貫¹³⁾ による研究が挙げられる。しかし、海水浴と海水浴場の全国的な様相の解明のためには、より多くの地域や海水浴場に目を向けた更なる研究の蓄積が必要であると考えられる。

そこで本研究では、現存する国内海水浴場のうち、海水浴場開設以前から、海中に直接身を浸す潮湯治^{註3)} という行動様式が存在していた大野（愛知県常滑市大野町）に着目した。先行研究および管見の範囲において、明治期以前に潮湯治という行動様式が、1年のうちのある一定の期間受容されていた地域は、大野だけであったと考えられた^{註4)}。したがって本研究では、大野潮湯治場および大野海水浴場を事例として取り上げ、いままですべてとして数点の史実しか取り上げられることのなかった、大野における潮湯治と潮湯治場、および海水浴と海水浴場の全体像を把握し、発祥から伝播、変化・変容するプロセスを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

現在、愛知県下における海水浴場数は21ないし26ヶ所と報告されている^{註5)}。このうち県内初の海水浴場開設地であり、且つ我が国における比較的早い時期^{註6)} に開設された地域が本稿で取り上げる大野である。大野を本研究の対象地とすることで、海水浴伝搬以前に行われていた行動様式が、どのような過程を経て成立するのか、また、海水浴伝搬期およびそれ以降の、変化・変容プロセスがみえてくる。

そこで、大野における潮湯治と潮湯治場、および海水浴と海水浴場の始まりと変遷を解明するために、次のような課題を設定した。

- (1) 潮湯治の発祥・発展期
- (2) 海水浴の発祥・発展期

なお本研究では、1912年（明治終年）までを対象期間とした。『日本転地療養誌 一名・浴泉案内』（1910）¹⁴⁾には、全国8地域84ヶ所の海水浴場が紹介されており、さらに、1922（大正11）年の内務省による全国調査¹⁵⁾では、216ヶ所の海水浴場（湖水浴場を含む）にのぼっている。

本研究の各課題における主要な資料は次のとおりである。「潮湯治の発祥・発展期」については、大野潮湯治に関する和歌、古文書、地誌、文芸書、市町村史、観光案内等の図書類を使用する。なおここには、個人所蔵も含め可能な限り収集できたもの、および各資料分析がなされた研究資料も含まれる。次に、「海水浴の発祥・発展期」については、大野海水浴・海水浴場史に係る、図書、雑誌、絵図、文芸書、随筆、日記類を使用する。なおここには、海水浴法や海水浴場の選定について解説された図書や雑誌類も含まれる。

3. 潮湯治の発祥・発展期

(1) 11世紀から12世紀にみられる湯あみ

平野貞蔵が1900（明治33）年に著した『大野海水浴案内』¹⁶⁾には、大野や大野の潮湯治に関する吟詠・歌が「多数アリ」として、次の和歌を紹介している。

「浴みにとあらひ流せし知多の浦に寐かさぬ
る袖のすゝしさ」（文信）

文信とは西暦900年後期から1000年初期の平安時代に生存した鎮守府將軍・尾張之守であった藤原文信と考えられるが、現在確証に至るだけの論拠に乏しい。

さらに、平安時代から鎌倉時代にかけての歌人である鴨長明（1155-1216）が詠じた和歌を紹介している。

「生魚の御あへもきよし酒もよし大野の湯あ
み日數かさねむ」（長明）

この歌は佐野¹⁷⁾によると次の考察がされている。

「二條天皇^{註7)}の應保二年（1162年）に鳥羽
法皇の和歌所寄人であった鴨長明が伊勢から

この地に渡り、滞在中『生魚の御あへもきよし酒もよし大野の湯あみ日數かさねむ』と詠じたのを見ると、此地の海水浴は恐らくそれ以前から認められて居たのであらう」（カッコ内筆者）

さらに、『濱寺海水浴二十年史』¹⁸⁾の中に、次のような解説がみられる。

「同地の古老で大野海水浴の功勞者である平野助三郎氏の談によると、この古歌は鴨長明の『伊勢路の記』^{註8)}の中に録されてあるが、長明は伊勢神宮の帰途、大野に遊んで潮湯に浴したのでであると（後略）」

ここでまず、鴨長明の和歌についての諸問題を挙げると、第1に、歌中にある「湯あみ」について、辞書にみられる一般的な解釈としては、湯に入る・浸かるといった入浴的性格が強い。よって、海中に直接浸かる行為であったのか、海水を温め「海水温浴」として入浴したのか、この歌からは正確に読み取ることは難しい。第2に、この和歌が鴨長明によって詠われたものとして、現存する歌集等¹⁹⁻²¹⁾には所収されていない。しかし、長明が伊勢への往路または帰路の路程において大野の地に赴いた論証が在り^{註9)}、考察の有力な対象として捉える必要がある。したがって、鴨長明が伊勢紀行中に大野に立ち寄りこの歌を詠じた時期は、辻²²⁾の見解による1186（文治2）年から1191（建久2）年の間と考えられる。

これら2歌から導き出せることとしては、11世紀から12世紀の大野における「潮湯治」の言及がなかったこと、文信の「浴み」、鴨長明の「湯あみ」の言及が見られることである。なお、浴槽に浸かる温浴としての浴み行為であったのか、海中に直接身を浸す浴み行為であったのかについての明確な資料は得られなかった。

(2) 14世紀の所伝

大野町海音寺に蔵されている、薬師如来像にまつわる所伝がある。薬師如来像の出現について、『尾張名所図会』『福聚山海音寺』の項には次のように記されている²³⁾。

「境内に薬師堂あり。堂前に来迎石と称して天然の立石あり。伝えいふ、薬師如来この石上に立たせ給ひて、海中より出現し給ふと云々」

この薬師如来像の出現と、大野の海中に浴する行為との関係について、平野は次のように述べている²⁴⁾。

「浴場ノ岸近キ海音寺ノ傳ヒニ、當寺ノ薬師如来〔俗ニ濱薬師ト云フ〕ハ、光嚴天皇（1313-1364）ノ建武年中（1334-1338）ヨリ出現シ玉ヒヌ其頃此邊リニ白癩病ニ罹リテ総身雪ノ如キ童アリ薬師ノ現出シ玉ヘル海ニ入りテ遊フコト屢ナリシニ、日毎ニ身ウルハシク紅サス顔トナリケレハ人々不思議ノコトニ思ヒ諸病人追々來リテ浴スルニ癒ヘズトイフ事ナシ是ヨリ諸方ニ聞ヘテ名高キ浴場トハナリヌトイヘリ此傳ノ如クナヲハイト古キコトニコソ」（カッコ内筆者）

この所伝から導き出せることは、14世紀中葉の薬師如来像の出現と疾患者の回復症例が端となり、大野の海水が、現代の水治療に分類される疾病治療に有効であることが発見され、且つ、大野の地が、治療・療養を行う湯治場として諸方に知れ渡るに至っていることである。

（3）16世紀から17世紀の潮湯治

大野町平野家に、徳川二代将軍秀忠（1579-1632）が、弟である福松丸^{註10)}に送ったとされる書状が残されている（図1）^{註11)}。



図1 秀忠書状（大野町 平野家所蔵）

この書状は、常滑市教育委員会によると²⁵⁾、福松丸が腫物治療を行うため大野に潮湯治に来ている際に、秀忠から送られてきた見舞い状であるとしている。また、書状中にみられる「内府様」とは内大臣であった徳川家康（1543-1616）を指す

ことから、この書状が書かれた時期は1596（慶長元）年から1600（慶長5年）までの間のものとしている。

次に、『大野町史』²⁶⁾には次のような記載がみられる。

「慶長3年（1598）、二代将軍秀忠の弟福松は十才の時に腫病を腦み、伏見から此地に來浴して癒えたことがある」（カッコ内筆者）

これらの論考について考察するに、書状中にみられる「中納言」すなわち即ち徳川秀忠が中納言であった時期は、1592（文祿元）年から1594（文祿3）年であり²⁷⁾、この書状の翻刻、内容等については再考すべき課題であると考ええる。しかし、16世紀において腫物治療のために大野に來て、成果があったという史実は貴重な資料である。

さらに、『大野海水浴案内』²⁸⁾には次のような記載がみられる。

「福松君ノ湯治其功著シカリシヨリ其後秀忠モ來ラレテ湯治セル事ト覺ユ其後國侯徳川義直（1601-1650）ヲ始メトシ代々年毎ニ來遊シテ浴治セラレシ事モ諸家ノ舊記ニ見エタリ」（カッコ内筆者）

したがって16世紀から17世紀は、14世紀同様に大野の海水がもたらす治療効果が認められていた。加えてこの期は、社会のある一定の階層に属する者、すなわち令外官や藩主等に支持されていたと考えられる。

なお、この書状にみられる「六月朔日」から、大野を訪れた時期が、7月初旬から中旬頃であったことがわかる。

（4）18世紀の潮湯治

この期の大野における潮湯治については、次のような資料の中にみることができる。

1) 『平野家実記』『徳川家記』

佐野²⁹⁾によると、「爾來國侯並に其一門の方には時折大野の汐湯治を試みられた」ことが各文書に残されているとして以下を挙げている。

「宣揚院^{註12)} 享保十六年亥八月十九日（1731年9月19日）知多郡大野之御湯治〔國侯系圖〕」

「同年九月（1731年10月）章善院^{註13)} 御成〔平野家記〕」

「明和八年八月十三日（1771年9月21日）
源明^{註14} 様潮湯治として知多郡大野江被爲成
〔徳川家記〕」

「安永四年八月十九日（1775年9月13日）
源明様大野に潮御湯治として被爲成〔徳川家
記〕」

「天明六年丙午八月（1786年9月）源白^{註15}
様御汐湯治の爲め、御成〔平野家記〕」（カッ
コ内筆者）

この資料から、16世紀から17世紀同様に大野
は潮湯治場として認知され、藩主、側室といった
階層に属する者によって支持されていたと考えら
れる。なお、潮湯治が実施された時期は9月から
10月にかけてであった。

2) 『木綿苑家集』

「水無月の 井さへ乾きて 暑き日の 夕か
たまけて 知多の浦の 潮汲来て さす鍋に
うつして湧し 浴解にもり 常滑山に 生ひ
立てる 毛桃の葉を い取り来て 揉みて絞
りて 水鳥の 鴨の羽の色の 青汁を 潮湯
に和えて 掻き混ぜて あやに香ぐはしき
うまし湯を ひた浴みに浴みて あがりてを
れば あやに涼しも」

『潮湯をあみて戯れによめる』と題されたこの
長歌は、横井千秋（1733-1801）^{註16} によるもので、
1785（天明5）年から1786（天明6）年頃の作³⁰
とされる家集『木綿苑家集』³¹ に収められている。

この長歌から、18世紀後期頃には、大野に居
住する藩士階層に属する者によって受容されてい
ること、海水を汲み取り風呂で湧かして浴す行為
が受容されていたこと、その時期は6月下旬から
7月下旬にかけて行われたことがわかる。

3) 『安永本邦萬姓司記』

1772年から1780年（安永年間）にかけて著さ
れた『安永本邦萬姓司記』³² の巻之上の一節に、
薬湯の名所として大野が挙げられている。

「一、薬湯之名所 大野、南野は鹽湯、しづ
きは滝水也」

名古屋温故会によれば³³、この書は「尾張國
に於て上首と推すべきものを挙げ、その所在名稱
等を記したもの」である。大野、および大野の
「鹽湯」が、温泉湯治に類似する薬湯、あるいは
薬浴地として認識されていることは注目される。

(5) 19世紀の潮湯治

この期の大野における潮湯治については、次の
ような資料の中にみることができる。

1) 『尾張名所図会』

大野の潮湯治を最も知らしめたのは、1844（天
保15）年に刊行された『尾張名所図会』^{註17} であ
ると思われる。この巻之六において、大野の様相
を絵図（図2）と解説によって紹介している³⁴。

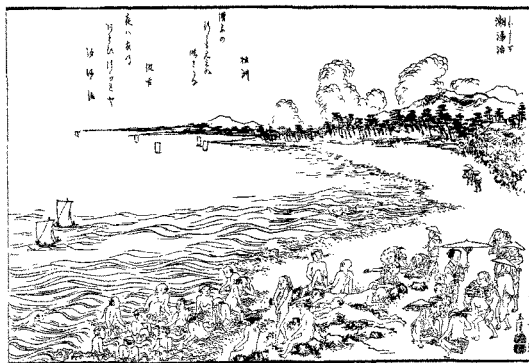


図2 『尾張名所図会』にみられる大野の潮湯治
1884（天保15）年

「塩湯治...同村海音寺西北の方に当る海浜は、
巖石多くありて、暑気の比は、遠近の諸人、
この海浜に出でて潮水に浴し、しかしてはま
た巖上に憩ひなど、終日に幾度も出沒する事、
五日・七日する時は、あらゆる諸病を治す。
これを世に大野の塩湯治といふ。かく暑月
には、浴場する群集夥しくて、数多の旅亭、家
ごとに二百人・三百人を宿し、他の温泉もか
くまで諸人の輻湊するを聞かず。また中人
以上は、旅館にこの海潮を汲みとらせ、再び湧
かして浴するもあり。しかれどもその効、海
中に身を潜せるには少し劣れりとぞ。また浴
場の暇には、この海中に捕る所の鮮魚を飽
くまでに食しつつ、枯腸を潤し、虚弱を補ふ
もまた治療の一助なるよし。なほこの浜に溢
れたるは、東浦その他所々に浴するあれば、
その繁盛推して知るべし。これすなわち海音
寺薬師如来の夢想にはじまりしとぞ。」

なお、同解説内に、前述した横井千秋の長歌、お
よび琵琶彦の歌が掲載されており、また絵図（図
2）の中には、桂洲、汲吉の名で和歌が掲載され

ているので、潮湯治に直接関連する歌を以下に抜粋する。

「あかこまのあかはたかにてあら磯の石にはらはふ汐湯治かな」(琵琶彦)

「夜は夜のあそひつかれや汐湯治」(汲吉)

この絵図には、1830年代またはこれ以前期における大野潮湯治の歴史を考察するうえで、有用な情報が現れている。

まず、解説および和歌にみられる「塩湯治」「汐湯治」の用語について、「この海浜に出でて潮水に浴し、しかしてはまた巖上に憩ひ」や「海潮を汲みとらせ、再び湧かして浴するもあり」の文面、および「あら磯の石にはらはふ汐湯治」から読み取れることは、大野の海浜に直接身を浸し浴す行為や、この行為に付する岩上に憩う行為、海水を汲み沸かし入浴する行為、これら行為の総体として「しお湯治」と称していたことが考えられる。

このほか注目されることとして、①潮湯治の受容者は1日に何度も入浴していること。②5日から7日間続けていればあらゆる諸病を治すという潮湯治の期間と効能。③各旅亭に200-300人という人数が宿泊していたこと、および「輻輳」から当時の旅宿の規模を想像するに、夏季期間における大野潮湯治の繁盛がうかがい知れる。④旅宿に海水を汲んで湧かし海水温浴として利用していた客層は、「中人」と記された中産・中流の階層^{註18)}以上の者によって受容されていたこと。⑤大野内の広範囲な海岸線において潮湯治が行われていたこと。⑥磯の付近の岩石の上に腹ばいになって寝そべる行為や、全裸の姿がみられること、が挙げられる。

2) 『郷中知多栗毛』

1843(天保14)年に著された『郷中知多栗毛』³⁵⁾は、知多郡大野に在住した著者・南瓜末成こと清水常然の取材あるいは体験に基づいて記述され、知多大野の旅籠に宿泊する潮湯治客に貸し出され読まれていた、1800年初頭の「膝栗毛」の流行にともなう二人連れの地域版膝栗毛物である³⁶⁾。

この物語の上巻に、潮湯治を行うことにより、種々の疾病に効果があることが記されている³⁷⁾。

「まづ第一に^{げかん}下疳の症をやしなひ、腹痛痔疾かさひぜんりんひやうしやうから^{註19)}、或は

労症にて気をふさぎ次第次第に色青ざめ、又ハ手足の廻りあしき類ひ、そのほか万病に功有る事、中々立かゝりのお咄にハ申尽せぬ」さらに、大野潮湯治場の状況について、次のような描写がみられる³⁸⁾。

「早湯治場にハ数万の人々、あだ口々の献言、女中ハ腰に手ぬぐひをまき、又ハゆかたのまゝ、まくりあげ、こわこわ安浅瀬にもあり、中にも勇気のわる達ハどぶんどぶんと立ちおよぎ、あをむきおよぎをするものあり、面黒かりける事ともなり。」

この資料から注目されることは、多くの潮湯治客で賑わっていることや、海中における「浮く」「泳ぐ」行為がみられることである。また物語中には、浴中に水しおきをあげたり、魚を追いかけて楽しむ描写等がみられ、開放的な感覚を享受している様子がうかがえる。

なお、この書物が描かれた19世紀中葉頃の大野は、既に西側最大の湊(大野湊)として知られていた。三河から東海道で伊勢・京都方面へ行くには、陸路よりも、知多半島(大野街道)経由の海路が遙かに近道で、江戸への物流をはじめ、名古屋、三河、伊勢への物流・旅人要の街として栄えていた³⁹⁾。また、少なくともこの書が成立した天保期頃迄には、既に大野の潮湯治は名所化し、療養目的のみならず、観光目的の人々も訪れていた⁴⁰⁾。

4. 海水浴の発祥・発展期

(1) 1881年から1882年の海水浴場の開設

以下は、後藤新平(1857-1929)が1882(明治15)年に著した『海水功用論附海浜療法』の「緒言」⁴¹⁾、および「凡例」⁴²⁾にみられる内容である。

「今茲辛巳(明治14年)ノ夏余公命ヲ奉シ愛知縣知多郡大野村海水浴場ノ検査ニ赴キ實地ノ景況ヲ目撃セシニ事創始ニ係リ從來俗間ノ因習ニ因テ海水用法ヲ誤マル者尠カラス歸來其弊害ヲ除カンガ爲メニ^{ひげん}ニ^{そう}洋書ニ就キ且ツ鄙見ヲ加ヘ海水功用論ヲ^{ほんちやう}艸シテ本廳ス(後略)」⁴¹⁾(カッコ内筆者)

「愛知縣下海水浴療所ヲ改良スルノ参考ニ供センガ爲メ(後略)」⁴²⁾

これを踏まえ、諸資料⁴³⁻⁴⁵⁾をもとに、大野に

における海水浴と海水浴場の発祥について、次のことが導き出せる。

1881(明治14)年の夏、当時愛知県医学校(現名古屋大学医学部)の学校長兼病院長であった後藤新平が、この地の潮湯治に注目し、現地を訪れ見分したことに始まる。なお、後藤はこの時、自ら千鳥ヶ浜(図4参照)の海浜に浴している。次いで同年、後藤の進言を受け、海音寺住職ほか有志の私費によって、海岸に隣接する海音寺境内に加温浴場「大野千鳥温泉」が設置される。さらに翌1882(明治15)年、後藤は内務省衛生局の官僚として、当省衛生局長であった長与専斎(1838-1902)を随行して再来し、浴場および施設の調査を行った結果「無二ノ海水浴地ナリト四海に発表セラル」⁴⁶⁾こととなった。また、当時の愛知県令(現在の県知事にあたる)であった國貞廉平(在任1880-1885)はこれを受け、さらなる海水浴場の奨励のためムルデル(1848-1901)^{註20)}に緻密調査を依頼、および「鋭意後援セラレシ」⁴⁶⁾ことにより、大野潮湯治場は大野海水浴場として知られるに至る。

後藤は自書の中で、この見分時のことを「用法を誤マル者尠カラス」と記している。これは、大野潮湯治の因習と、後藤が唱える海水浴との間に相違がみられたことに因る。具体的には、大野の潮湯治が、先述の『郷中知多栗毛』にみられるような「立ち泳ぎ」や「仰向き泳ぎ」といった行動様式を伴っていることや、『尾張名所図会』にみられる「日に幾度も出沒する事」に対して、後藤が唱える海水浴が、小口⁴⁷⁾が述べるところの「単に海中に身を浸しているだけという行為が海水浴の基本形」であったことに起因していると考えられる。また後藤は、自書内随所において海水浴を行う者を「患者」と表現している。後藤が推し進めようとした海水浴とは、既存の大野潮湯治にもみられた病氣治療・療養としての行動様式を、さらに西洋の医学的見地から修正・補うかたちで大系化した、諸病に対応する具体的海水浴治療法であった。加えて、後藤が推し進めようとした海水浴場とは、海水浴治療・療法を実施する環境や施設としての場であり、そのため、大野を含めた愛知県下の海水浴場改良を推し進めようとしていた。

後藤が推し進める具体的な海水浴法については、①症状により長短はあるが、概ね逗留は25日から30日を標準としていること。②頻度は1日に1浴で10分程度が望ましく、逗留中期以降は日に2回、延べ30分程度の水浴もよいとされたこと。③時刻は午前中が最適であるが、症状・性別によっては午後でもよいこと、等が挙げられる⁴⁸⁾。海水浴場の選定については主に、①潮の干満が大きく波動の強い場所、②岩石が多くある場所で、海浜は細砂であること、等が立地条件として挙げられており、大野の潮湯治場は立地好適地と考えていた⁴⁹⁾。

(2) 寺田寅彦の潮湯治体験

寺田寅彦が1935(昭和10)年8月に『文芸春秋』に発表した「海水浴」と題する文⁵⁰⁾に、1881(明治14)年の大野潮湯治体験を次のように記している。

「明治十四年の夏、当時名古屋鎮台に勤めていた父に連れられて知多郡の海岸の大野とかいう所へ『塩湯治』に行った。(中略)ずっと大きくなってからよく両親から聞かされたところによると、そのころとかく虚弱であった自分を医師の勧めによって『塩湯治』に連れていったのだが、いよいよ海水浴をさせようとするとひどくこわがって泣き叫んでどうしても手に合わないので、しかたなく宿屋で海水を沸かした風呂を立ててもらってそれで何日何度も温浴をさせた。とにかくそのひと夏の湯治で目立ってからだ丈夫になったので両親はひどく喜んだそうである」

注目されることとして、寺田によって行われた「塩湯治」は、病氣治療と言うよりは、病氣にかりやすい体質を改善するための手段として受容されていることである。また、「塩湯治」療養に至った理由として、医師の勧めに因ること。実施期間と頻度については、複数日、日に数浴実施されていること。実施内容は、海水温浴療法であったことが挙げられる。

さらに注目されることとして、同文章内に「塩湯治」と「海水浴」の用語が使用されていることである。これら用語について、寺田は同文章内で次のように述べている。

「明治十四年頃にたとえ名前は『塩湯治』で

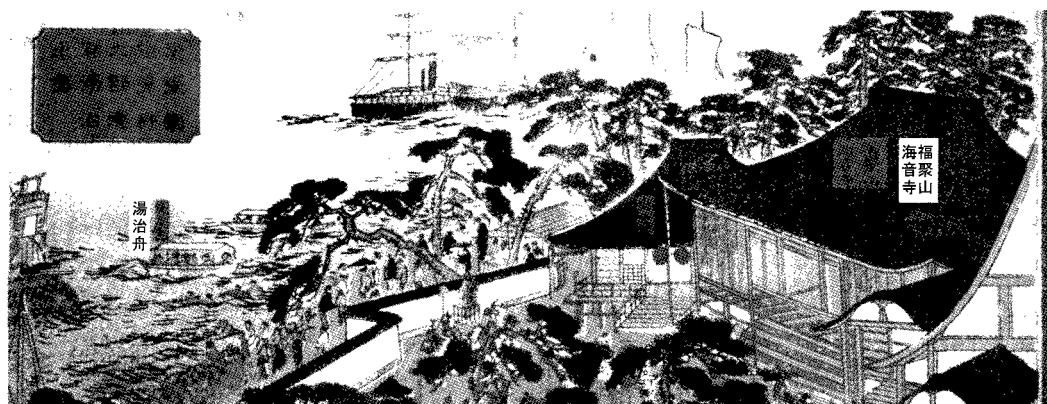


図3 『尾張國知多郡大野港潮湯治之圖』(部分)にみられる潮湯治
1882(明治15)年版(大野町 加藤勝彦氏蔵)



図4 『尾張國大野海水浴場眞景之圖』(部分)にみられる瑠璃が浜・千鳥ヶ浜
1894(明治27)年版(尾張大野史研究会蔵)

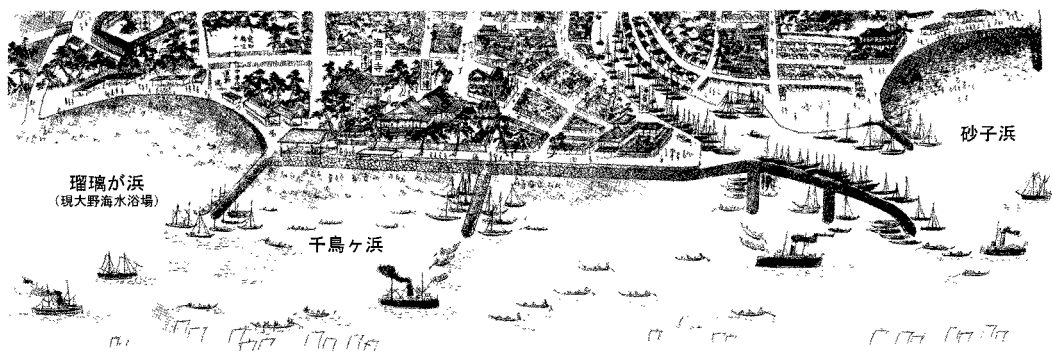


図5 『尾張國大野海水浴場眞景之圖』(部分)にみられる瑠璃が浜・千鳥ヶ浜・砂子浜海水浴場
1907(明治40)年版(尾張大野史研究会蔵)

もすでに事実上の海水浴が保健の一法として
広く民間に行われていた」

したがって、次のことが考察できる。第1に、これまでの資料にみられた大野の「潮湯治」と、寺田の言う「塩湯治」は同義であると考えられること。第2に、海水浴という概念は、健康や衛生といった保健の一領域であり、大野の「潮湯治」と1881（明治14）年に大野に伝搬された「海水浴」は同義であると考えられることである。

（3）1882年および1894-1907年の絵図から

1）『尾張國知多郡大野港潮湯治之圖』

図3は、1882（明治15）年に描かれた『尾張國知多郡大野港潮湯治之圖』⁵¹⁾（部分）である。

この図からみてとれることは、沖合に「湯治舟」と説明描きされた小舟が出ていることから、海浜の浅瀬だけでなく、深瀬においても潮湯治が行われており、多様な行動様式をもって成立していたことがわかる。このほか、図題にあるように、「潮湯治」の名称がみられる。

2）『尾張國大野海水浴場眞景之圖』

図4および図5は、1894（明治27）年初版と、その次版となる1907（明治40）年の『尾張國大野海水浴場眞景之圖』⁵²⁻⁵³⁾（部分）である。

この図から窺い知れることは、明治27年には「瑠璃が浜」（図4左手、現大野海水浴場）と、海音寺前に位置する「千鳥ヶ浜」（図4中央付近）の2海水浴場が在り、1907（明治40）年までには前山川の南（図5右手）に「砂子浜」（現大野漁港付近）を加えて、計3ヶ所の海水浴場が存在していたことである。

（4）新美南吉の日記

1942（昭和17）年に初版された新美南吉（1913-1943）^{註21)}の童話『おぢいさんのランプ』⁵⁴⁾は、立身の願いを抱く孤児の主人公が、ふとしたきっかけからランプ屋となり、ランプとの出逢いから別れまでの経過を通して、一人の人間としての仕事の意味を明かすところにテーマを置いた物語作品⁵⁵⁾である。この作品の中のおじいさんの話に、大野の潮湯治に行く客の乗る、人力車を曳く様子が記されている⁵⁶⁾。

「おぢいさんの話といふのは次のやうであつた。今から五十年くらゐまへ、ちょうど日露戦争の時分のことである。（中略）或る夏の

日のひるさがり、巳之助は人力車の先綱を頼まれた。その頃岩滑新田には、いつも二三人の人力曳がゐた。潮湯治に名古屋から来る客は、たいいてい汽車で半田まで来て、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子までゆられていつたもので、岩滑新田はちやうどその道すぢにあたつてゐたからである」

ここで昭和期の童話作品を取り上げた理由は、新美本人が記していた日記の中の、1941（昭和16）年11月25日付に「父の話」を記しており⁵⁷⁾、物語の中の「おぢいさんの話」というのは南吉の父自身の実話が基になっている⁵⁸⁾という点である。すなわち、父・渡辺多蔵（1884-1960）が子ども時分であった明治中葉頃は、大野の町へ潮湯治や避暑を目的として、遠方からも富裕層らが訪れており、大野は観光名所として、あるいは避暑地として遠方に知れ渡っていたことがわかる。

「父の話…岩滑新田の、えいたんぼと熊七といふのが、そのころ人力曳きをしてゐた。ふたりとも新田から大野まで避暑客をのせて、一どゆけば三十五錢ほどのよい錢になるので、意気こんでやつた。二時間程で行つて來れた。（中略）名古屋から大野へ潮湯治にゆく金持ち連が半田まで汽車できて、そこから大野まで、人力をやとつたものだ。で、そのころ、半田にも大野にも、三十人ぐらいつつ人力ひきがゐた」⁵⁷⁾

新美の『おぢいさんのランプ』および『日記』には、「海水浴」ではなく「潮湯治」という名称が使用されている。遠山によれば⁵⁹⁾、「潮湯治という言葉は昭和初め頃まで使われていたらしい」と考察している。したがって潮湯治の名称は、昭和初期頃まで、海水浴という名称とともに受容されていたと考えられる。さらに、大野の潮湯治場へは「少なくとも南吉の父多蔵の少年時代には、既に子どもたちだけで割合気軽に出かけていた」⁵⁹⁾ことから、明治中葉頃は富裕層のみならず、近隣の子どものたちの行動様式としても潮湯治が受容されていた。

（5）1900年の『大野海水浴案内』

『大野海水浴案内』⁵⁹⁾によると、この書が刊行された1900（明治33）年の大野は、広く一般市民に海水浴が受容されていたことがわかる。

特に注目される内容について、第1に「老幼男女自由ニ浴シ得テ危険ナキハ」や「夏季節ニ至レハ、貴賤貧トナク、病ナキ者、保養スル者、病痾ニ苦ム者、旅行ガテラノ者、幾百人トナク集ヒ来リテ」から、一部階級の者のみに受容されるものではなく、老若男女問わず、病氣治療や療養等の目的以外の者にも、海水浴が受容されていること。第2に、「マダ世ニ稀レナル好治場トイフベシ」および「此海水唯此國ニ名高キノミカ、遠キ國々モ聞エ亘リテ」からは、大野の海水浴と海水浴場が、全国的にみても先例であり、且つ、広域的に知られるに至っており、「旅舎アキ屋知已アル戸毎寺ノ片隅マデヲ填メ」からは、当時の盛況ぶりを窺い知ることができる。第3に、「浴ノ間ニハ名所古跡ヲ探ル文人モアリ、鮮魚ニ酒ニ枯腸ヲイヤスモアリ、海岸ノ涼風ニ衣ヲウタスモアリ、小舟ニ棹シテ漁リヲ樂ムモアリ」および「終日ニ幾度トナク出テ、浴ワメルサマイト面白シ」からは、各々がその場で自由に過ごしていることが窺い知れる。このほか、「景勝ニ富ミ、乾燥セル土地ノ清キ空氣ノ間ニ之快樂ハ心易ク、貧リ得ルモ加養ノ一助ニシテ、世間多ク得難キ好遊區ナリ」といった、空気浴や海浜療養としての受容形態がみられることも注目される。

5. まとめ

本研究は、大野における潮湯治と潮湯治場、および海水浴と海水浴場の発祥から伝播、変化・変容するプロセスを明らかにすることを目的とし、次のようにまとめることができた。

(1) 「潮湯治の発祥・発展期」

11世紀から12世紀における行動様式について、現存するこの時代の資料数が限られていたという点は課題として挙げられるが、この期の行動様式は「湯あみ」と呼ばれ、大野の海中に直接身を浸す、あるいは大野の海水を汲み沸かし浴す行為が存在していたと考えられる。

14世紀には、大野の海水に直接身を浸し浴することにより、特定される疾病の治療に効果があることが発見されている。加えてこの情報は諸方に伝搬され、大野外からの受容者を獲得している。

16世紀から17世紀の大野は、病氣治療を目的とした湯治として、社会のある一定の階層に属す

る者、すなわち令外官や藩主等に支持され受容される期として位置づけられる。

18世紀について、この期の手がかりを知る資料の中に、「鹽（塩）湯」「潮湯」「潮湯治」「汐湯治」といった用語が出現する。この用語の名辭について、大野の海水を「しお（ほ）湯」、大野の海中に直接身を浸したり大野の海水を沸かし浴すことを「しお（ほ）湯治」と称し、同義であると考えられた。このほか、この期の特徴として、海水を自宅に持ち帰り湧かし浴すといったより能率的な行動様式が発明され受容されている。また、薬湯としての効能を有することが紹介されており、これまでの病氣治療を目的とした受容に加えて、今日の温泉入浴に近い形態としても受容された期として位置づけられる。

19世紀になると、大野は「大野の潮湯治」として広く知れ渡り、名所化し、観光目的としても受容されている。また、各々が自由気ままに受容可能な社会的背景が成立している。このことから、18世紀から19世紀にかけての大野の塩湯治は、多様な行動様式が成立した時期であると考えられた。

(2) 「海水浴の発祥・発展期」

大野における海水浴と海水浴場の概念伝播について、1881（明治14）年から1882（明治15）年における、後藤や長与、國貞による働きかけは、重要な役割を果たしたと考えられる。彼らによって推し進められた海水浴とは、既存の大野潮湯治にもみられた病氣治療・療養としての行動様式を、更に西洋の医学的見地から修正・補うかたちで大系化した概念であった。また、海水浴場とは、この海水浴療法を実施する環境、すなわち場を指し、海水浴場として整備しようと試みた県下最初の事例が大野であった。

大野潮湯治と大野海水浴の概念について、寺田寅彦の文を頼りに考察するに、後藤らによって推し進められた、病氣治療や療養、健康や衛生といった保健の一領域としての概念は、これまでの大野潮湯治のなかにも存在していた。したがって、潮湯治はすなわち、海水浴と同義の概念を有する行動様式であると考えられる。

1900（明治33）年頃の大野海水浴と大野海水浴場について、大官貴顕に限らず、また老若男女

問わず、或いは疾病の有無を問わず、各々が自由に海水浴という行為を受容している。加えて、旅宿規模を上回る来場者がみられることから、大野の海水浴と海水浴場が、庶民の間に広く認知されている。海水浴と海水浴場が、より広い概念として変容される時期として位置付けられる。

(3) 今後の課題

おわりに、本稿において残された課題も多い。明治後期から現代に至るまでの、大野海水浴と海水浴場の普及過程についての言及に至れなかった。この期間の特徴として、国内および愛知県下において、海水浴場数が急速に増加したという点において特徴をもつ。

先行研究からの課題の1つであったレジャー化の時期について、岡田のレジャー概念^{註22)}を頼りに考察を加えると、次のようにまとめられる。

まず第1に、病氣治療や療養を主目的としない行為・行動は、19世紀における潮湯治期のなかにみることができる。『郷中知多栗毛』にみられるような、立ち泳ぎや背浮きといった、いわゆる遊泳する行為は、病氣治療の一法とは考えにくい。加えて、この期の大野の潮湯治は、個々のニーズによって受容されており、自己決定と自由裁量に基づく行動様式と捉えられる。第2に、宿泊を伴う非仕事時間、すなわち個々の自由時間に行われていた行為に加えて、遊び、面白さ、快楽といった、開放的な感覚を享受している活動描写が『郷中知多栗毛』のなかにみられる。したがって、大野の潮湯治が、この地の習俗として地域社会に根付き、認知されていたと考えられる。つまり、レジャーが成立するための不可欠条件は、海水浴が伝搬される以前の、潮湯治期に内在していたと考えられる。しかし、レジャー化、あるいはレジャー化の時期の特定については、本研究の資料および考察内容から言及には至れなかった。

このほか、海水浴伝播期以後の、大野海水浴と海水浴場発展の社会的要因の1つとして、鉄道の敷線が挙げられる。具体的には、1886(明治19)年3月に熱田から知多半島東岸中部の武豊駅までの半田線(現武豊線)が開設され⁶¹⁾、1888(明治22)年9月には東海道線浜松・大府駅が開業⁶²⁾、大府・武豊間が東海道線の支線となっている。さらに1912(明治45)年2月には、愛知電気鉄道

(現名鉄常滑線)によって伝馬(名古屋市熱田区)―大野間が開通している⁶³⁾。また愛知電気鉄道は、海岸線を走行する特徴を有していたこと等から海水浴客誘致に力を入れ、観光拠点とすべく無料休憩所や棧橋等を設置して積極的な海水浴場開発を行っている⁶⁴⁾。このことから、鉄道会社による敷線と海水浴場経営や関与が、大野海水浴、海水浴場の発展に拍車をかけた外的要因の1つであることが推察されるが、さらなる、より深い研究の蓄積が必要であると思われる。あわせて今後の課題としたい。

付記

本研究で使用した資料を収集するにあたり、尾張大野史研究会、石井丈也氏に多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

註

註1)『レジャー白書』によると、海水浴参加人口は年間1,890万人と報告されている。次いで、釣りが年間1,120万人、サーフィン・ウィンドサーフィンが年間120万人である。(日本生産性本部編、レジャー白書[2009]、日本生産性本部、東京、2009)

日本観光協会の報告によると、日本全国に1,221ヶ所の湖水・海水浴場が開設されている。この資料を基に海岸線に所在する海水浴場のみを抽出すると、全国1,192ヶ所の海水浴場が開設されていることになる。(日本観光協会編、数字でみる観光[2009-2010年度版]、創成社、東京、2009)

農林水産省の報告によると、日本全国に1,441ヶ所の海水浴場が開設されており、年間4,230万人が海水浴場を利用している。(農林水産省大臣官房統計部編、第11次漁業センサス・第2巻[海面漁業に関する統計・都道府県編]、農林水産省大臣官房統計部、東京、2005)

註2)『日本書紀』にみられる「游沐^{カハアミ}」は水浴と解されるであろうし、伊邪那岐(伊弉諾)の身を清める禊行為は「滌^{イザナギ}(濯^{ススグ})」とあらわされ、海中に沈濯、潜濯、浮濯の表現がみられる。

註3) 海水浴と潮湯治の歴史について、小口(1986)は次のように述べている。

「明治14(1881)年までは、日本では海水浴として海中に身を浸す習慣は存在しなかった。(中略)近代海水浴が導入される以前にも、きわめて局地的な現象であったが、海中に身を浸して行う疾病の治療法が存在した。それが潮湯治である。」

註4) 大野の潮湯治について、小口(2002)は次のように述べている。

「日本では、身を湯(温泉)に浸す湯治は入浴療法としてすでに各地で行われていたが、海中に身を浸す潮湯治は、この大野だけで行われる特異な習俗であった」

註5) 日本観光協会(2009)の報告によると21ヶ所。農林水産省(2005)の報告によると26ヶ所。

註6) 1881(明治14)年『内務省衛生局雑誌』第34号に掲載された「海水浴説」と題する論考以降、全国的に海水浴場が開設され始める。

註7) 二條(1143-1165)…第78代天皇。在位は1158年から1165年。

註8) 『伊勢記』と称されるものと思われる。鴨長明の『伊勢記』は、現在その完本は伝わっておらず、①夫木和歌抄所引『伊勢記』佚文、②『鴨長明伊勢記抜書』、③『歌枕名寄』などの名所歌集、地誌類、などによってその存在が知られるのみである。(辻勝美、鴨長明「伊勢記」をめぐる諸問題、語文44:145-153、1978)

註9) 長崎によると、鴨長明は①伊勢(『文机談』『夫木抄』『伊勢記抜書』)、②摂津(『方丈記』『鴨長明集(86)』)、③鎌倉(『吾妻鏡』『菟玖波集』)への3度の旅をしていると論じている。(長崎健、鴨長明と伊勢紀行―「伊勢記」をめぐる、国文学・解釈と鑑賞71(3):102-109、2006)

築瀬によると、鴨長明の歌には、野路→石部河原→大野(伊勢記抜書一)の道順を示すものが存すると論じている。(築瀬一雄、鴨長明の新研究、風間書房、東京:235-237、1962)

このほか、大野海水浴場の近隣に、奈良県御所内にある鴨都波神社の分社である鴨都波神社(常滑市新田町)がある。この神社の主祭神である事代主命は元々鴨族が信仰していた神であり、参詣のために立ち寄ったとも考えられる。(鴨都波神社内の石碑文による)

註10) 松平忠吉(1580-1607)の幼名。尾張国清洲藩主。

註11) 尾張大野史研究会は、この書状を次のように翻刻している。(尾張大野史研究会2010年度研究資料)

「知多志を湯治場を、の
江い類哉 中納言
切と書状者祝着須湯治故
腫物能、也介由に之行
将之具足成出来次第
今爾行こ、爾と無何事
内府様一恒御楚婦能
間今正安禮に國可刻
今左可散之
六月朔日 秀忠花押」

註11) 徳川宗春の実母・梅津(1663-1743)。

註13) 尾張名古屋藩7代藩主・徳川宗春(1696-1764)。

註14) 美濃高須藩5代藩主・徳川治行(1760-1973)。この時代の名乗りは松平義柄。1777(安永6)年に本家尾張藩主・徳川宗睦の養嗣子となり徳川治行と改名。

註15) 尾張名古屋藩第9代藩主・徳川宗睦(1733-1800)。

註16) 尾張名古屋藩の藩士、国学者。諱は時広、後に宏時。号は木綿苑・田守。雅号は千秋。

註17) 『尾張名所図会』は、江戸時代末期から明治時代初期にかけて刊行された尾張国の地誌で、尾張国八郡の名所が描かれた全13巻から成る。1838(天保9)年から1841(天保12)年までの3年間をかけて執筆され、1844(天保15)年に全編7巻が刊行。後編6巻は1880(明治13)年の刊。

註18) 新井白石(1657-1725)の随筆『折たく柴の記』下巻に次のような表現がみられる。「たとひ一両の金をもて、二両の金に換て、^{しほ}

半減の損失ありといふとも、これらの損失あらむは、中人より以上の事なるべし。それより以下は、一年を送る間にも一兩の金を得ざるもありぬべし」（新井白石：松村昭校注、折たく柴の記、岩波新書、東京：389、1999）

註19) 「下疳の症」は陰部に生ずる伝染性の潰瘍を、「かさ」は腫物・かさぶたを指す瘡を、「ひぜん」はダニの寄生による皮膚感染症である疥癬（かいせん ひせん）とも言う）を、「りんひやうしやう」は淋病症を指すものと解釈される。（築田多吉、家庭に於ける實際的看護の秘訣・増補新訂版、研数広文館、東京、1973）

註20) Anthonie Thomas Lubertus Rouwenhorst Mulder。オランダ人。王位土木工学高等専門学校（現 Delft University of Technology）に学び、後、水利省に勤務。日本へは1879（明治12）年に土木工師のいわゆるお雇い外国人として来日、河川の改修や築港に携わる。

註21) 愛知県知多郡半田町（半田市新生町）出身の児童文学作家。

註22) レジャー概念について、岡田は次のように定義している。

「レジャーとは、非仕事時間から社会的・生理的必需時間を除去した自由時間に、自律的に決定し、自由裁量に基づいて行う活動の中で、純快楽を意図・指向した活動である」

また岡田は、レジャーが要素的には、レジャーが成立するための最低不可欠な「保障要因（時間要因・社会構造要因）」と、レジャーの本質的活動特性に係わる「内容要因（現象的要因・同期的要因）」によって実体化されると述べている。（岡田至、レジャーの社会学、世界思想社、東京：44-47、1982）

・時間要因...非仕事時間が社会的・生理的必要時間のミニマム以上にあることを指す

・社会構造要因...私生活における個人の自由の保障ならびに社会的にレジャーが是

認されていることを指す

・現象的要因...活動が非拘束的・非義務的性質をもつこと（自己決定と自由裁量が基軸となっている活動）を指す

・同期的要因...活動のプロセスと結果を総合的に評価しつつ、純快楽・純満足を常に志向する活動であることを指す

引用・参考文献

- 1) 瀬崎圭二、夏目漱石『木屑録』の海水浴、名古屋短期大学研究紀要 45：300-312、2007
- 2) 中村正樹、明治期における海水浴場の成立に関する一考察、地域研究 41(2)：14-22、2001
- 3) 小口千明、療養から行楽型海水浴への変容と各地の海水浴場、地方史研究 48(5)：9-14、1998
- 4) 小口千明、日本における海水浴の受容と明治期の海水浴、人文地理 37(3)：23-37、1985
- 5) 小口千明、潮湯の偏在性に関する地理学的予察—日本における海水浴普及との関係から、城西人文研究 13：57-74、1986
- 6) 小口千明、日本人の相対的環境観 「好まれない空間」の歴史地理学、古今書院、東京、2002
- 7) 小長谷有紀ほか編、アジアの歴史地理(3)林野・草原・水域、朝倉書店、東京：249-260、2007
- 8) 上田卓爾、日本の海水浴の始まりについて、静岡英和学院大学紀要 4：81-100、2006
- 9) 上田卓爾、日本の「海水浴の大衆化」について—岡山県の海水浴の歴史を例として、日本観光研究学会学術論文集 22：101-104、2007
- 10) 十代田朗・岡村憲之、新潟県における海水浴の発生と開発初期の海水浴場の空間構造に関する研究、日本建築学会北陸支部研究報告集 38：421-424、1995
- 11) 富澤一弘・若林秀之、近代富山県における海水浴に関する研究、産業研究 41(2)：43-63、2006
- 12) 森口保、島根・海水浴事始め、島根県観光学会誌 12：45-53、1994

- 13) 綿貫慶徳、明治後期から大正期における大阪毎日新聞社の浜寺海水浴場経営に関する史的考察－新聞販売ターゲットとしての新中間層に着目して－、体育史研究 21: 1-14、2004
- 14) 長尾折三、日本転地療養誌 一名・浴泉案内、吐鳳堂、東京: 175-662、1910
- 15) 内務省衛生局編、各地方ニ於ケル登山ニ適スル山嶽竝海水浴場・水泳場に關スル概況、1922 (木下秀明監修「社会体育スポーツ基本史料集成」第 11 卷、青空社、東京、1993)
- 16) 平野貞造、大野海水浴案内、三益社、愛知: 26、1900 (平野家所蔵)
- 17) 佐野重造編、大野町史、大野町役場、愛知: 303、1929
- 18) 大阪毎日新聞社編纂、濱寺海水浴二十年史、大阪毎日新聞社、大阪: 7、1926
- 19) 築瀬一雄編、鴨長明全集: 校注、風間書房、東京、1980
- 20) 大曾根章介・久保田淳編、鴨長明全集、貴重本刊行会、東京、2000
- 21) 宮内庁書陵部編、圖書寮叢刊 夫木和歌抄、明治書院、東京、1988
- 22) 辻勝美、鴨長明「伊勢記」をめぐる諸問題、語文 44: 145-153、1978
- 23) 岡田文園・野口梅居撰・小田切春江画、尾張名所圖會 卷之六、1844 (林英夫編、日本名所風俗図会 6: 東海の巻、角川書店、東京: 219-220、1984)
- 24) 前掲書 16、8-9 頁
- 25) 常滑市教育委員会編、常滑の古文書 常滑市文化財調査報告書 第 6 集、常滑市教育委員会、愛知: 28、1979
- 26) 前掲書 17、303-304 頁
- 27) 黒坂勝美・國史大系編修會編、新訂増補国史大系 (38): 徳川實紀 (第 1 篇): 台徳院殿御實紀 卷 1、吉川弘文館、東京: 380-383、1964
- 28) 前掲書 16、13 頁
- 29) 前掲書 17、304 頁
- 30) 市橋鐸、横井千秋考－生涯・系譜・年譜・家集・短歌抄、説林 7: 46-53、1960
- 31) 横井千秋、木綿苑家集 (古屋市教育委員会編「名古屋叢書」第 15 卷文学編 (2)、名古屋市教育委員会、愛知 71-87、1962)
- 32) 名古屋温故会編、名古屋温故會叢書 (7): 安永本邦萬姓司記 (卷之上)、名古屋温故會、愛知: 307、1942
- 33) 同上書、273 頁
- 34) 前掲書 23、220-222 頁
- 35) 南瓜末成、郷中知多栗毛、書肆文泉堂、1843
- 36) 岸野俊彦編、「膝栗毛」文芸と尾張藩社会、清文堂、大阪: 17、1999
- 37) 同上書、144 頁
- 38) 同上書、171-172 頁
- 39) 同上書、19-20 頁
- 40) 同上書、86-87 頁
- 41) 後藤新平、海水功用論 附海浜療法、成文社、愛知: 甲 1-3、1882 (岸野雄三編、近代体育文献集成 第 27 卷、日本図書センター、東京、1983)
- 42) 同上書、乙 1-2 頁
- 43) 野田惣太郎編、大野・新舞子・新須磨海水浴案内 (修訂版)、亀崎印刷、愛知: 8-14、1926
- 44) 前掲書 16、9-11 頁
- 45) 前掲書 17、304-306 頁
- 46) 前掲書 43、9 頁
- 47) 前掲書 4、28 頁
- 48) 前掲書 41、37-46 頁
- 49) 前掲書 41、51-54 頁
- 50) 寺田寅彦、寺田寅彦全集 (第十卷)、岩波書店、東京: 135-142、1935
- 51) 「尾張國知多郡大野港潮湯治之圖」、楽山庄七、1882 年、加藤勝彦氏所蔵
- 52) 江五郎、尾張國大野海水浴場眞景之圖、加藤吾一郎、1894 年、尾張大野史研究会蔵
- 53) 江五郎『尾張國大野海水浴場眞景之圖』、加藤吾一郎、1907 年、尾張大野史研究会蔵
- 54) 新美南吉、おぢいさんのランプ、有光社、東京、1942
- 55) 山下浩・安藤優希、新美南吉の第一童話集「おぢいさんのランプ」の本文研究－転写原稿の問題を中心に、論叢現代文化－公共政策 1: 214-198、2005
- 56) 大日本図書編、校定 新美南吉全集 第 2 卷、大日本図書、東京: 167-168、1980
- 57) 巽聖歌・滑川道夫編、新美南吉全集 (8) 日

- 記 [2]、アリス館牧新社、東京：186-187、1975（第12版）
- 58) 伊藤眞一郎、新美南吉「おぢいさんのランプ」小考、国語教育研究 26（上）：323-330、1980
- 59) 遠山光嗣、「おじいさんのランプ」の舞台はなぜ大野なのか（Ⅰ）、新美南吉記念館研究紀要 3：22-41、1997
- 60) 前掲書 16、8-9 頁
- 61) 名古屋鉄道広報宣伝部編、名古屋鉄道百年史、大日本印刷、愛知：18-19、1994
- 62) 鐵道省編、日本鐵道史（上巻）、鐵道省、東京：491-501、1921
- 63) 前掲書 61、73-75 頁
- 64) 前掲書 43、31-43 頁

（受付：2010 年 12 月 13 日）
（受理：2011 年 2 月 28 日）